

# ナイチンゲールの看護観

— その目的実現のための教育方法—Nursing is not an Art but a Character—

広島文化学園大学看護学部  
佐々木 秀 美

## ■ はじめに

看護とは，“Nursing is not an Art but a Character”であると述べたナイチンゲールは「優れた看護師は優れた女性」<sup>1)</sup>であると述べ、優れた女性は「その知性 (intellect), 倫理 (moral activity), 実践 (practice) において最上のものを患者に惜しみなく与える女性である」<sup>2)</sup>と述べた。優れた女性が具有すべき特性、つまり、それは優れた看護師が具有すべき特性である。そして、ナイチンゲールは看護師がどうあるべきかに付いて、又、どう教育されるべきかに付いて「訓練とは何が成されねばならないかだけでなく、どの様に成すべきかも教える事である。」<sup>3)</sup>と述べている。人の精神は経験や活動という社会過程のみでのみ、その存在を持ち、発展させている。ゆえに、精神は社会過程を前提とする。よって、ある対象に関して私達はその思考を完全に明瞭にするためには、対象がおおよそどれくらいの実際的な結果、つまり行為として表出されたかを観察することである。そこには必然的に彼女の教育思想が反映される。

既に筆者は『ナイチンゲールの教育思想の源流 日常生活は心に問いを抱かせ、知性はその問いに答えを要求する』<sup>4)</sup>、『ナイチンゲール精神的危機から自立へのプロセス』<sup>5)</sup>、『ナイチンゲールイギリス陸軍を改革する—学習 (経験) したことから学習せよ』<sup>6)</sup>、『ナイチンゲール—女性の専門職を創設する—19世紀は女性の世紀』<sup>7)</sup> などについて報告したが、女性の専門職を創設すること、それは、病院看護の質の向上、国民や兵士の体力向上

をも目指した公衆衛生の普及のための取り組みを実践することにある。そのことを女性達が実践すればイギリス社会に貢献したことになる。さすれば女性達は社会での有用性を認識させることにつながり、社会的位置づけも高められる。従って、ナイチンゲールの看護教育の目的は女性の人格と国民の健康を主眼としたものであり“人権思想”に基づいている。その根本思想に加え極めて実践的・行動主義的思想であり、かつ、極めて“自然の法則”に添った考え方の持ち主であった。彼女はイギリスの経験認識論と科学主義時代の影響を受け、現実社会の観察で得られた情報とその分析によって社会問題を明確にし、その問題の解決・改善・改革を積極的に推進した女性であった。

看護教育を開始するという事、それ自体『ナイチンゲールと看護教育—その教育目的へのアプローチ』<sup>8)</sup>で報告したように、女性にシステマ的な教育を与える事、即ち、教育環境として整備された教育機関で医学的な教育を受けさせることによって“看護師”という新しい職業を生みだし<sup>9)</sup>、教育を受けた看護師達が病院で患者の回復に向けた支援と健康教育を成す。その事によって、患者の健康が回復し、再度、社会において生き生きとした活動的な生活をする事が可能になる。さらにナイチンゲールは、「明確な目的は実現していかなければならない」<sup>10)</sup>と述べ、看護教育の目的は病院看護をより良くしていくことであると述べている。そして労働によって自らの生活の糧を得ようとする女性達を可能な限り訓練し、組織化していくことであるとも述べている。それは女性達の雇用の促進にもなり、社会的・経済的自立にも

つながる。知性に優れ、その実践において倫理的である理想的な看護師像を追求する。それは専門職者としての専門的な知識・技術を有することであり、一人の人間としての人格の問題を追及することでもある。

ナイチンゲールが実施した教育方法については既に筆者が『ナイチンゲールと看護教育—その教育方法へのアプローチ』<sup>11)</sup>で論じたが、それはナイチンゲールが述べたように、実験的試みであった。そして、1860年にナイチンゲールが開始した看護師の教育方法は明らかに“見習い制度”である。井上久男が「制度は思想の反映である」<sup>12)</sup>と述べたように一般にあらゆる制度は、それを作った者達の思想を反映する。看護に対する高邁な理想を抱いたナイチンゲールが実践した教育方法は見習い制度であり、徒弟制度を連想させるに相応しい。もし、“見習い制度”による教育方法が、彼女の理想とする看護師の育成が可能であるとしたら、その教育作用はいかなるものなのか非常に興味深い問題である。そこで、本論では、イギリスにおける教育の実情とその教育改革運動も含めながら、ナイチンゲールが実施した“見習い制度”についてあらためて検証する。

## ■ イギリスにおける教育の実情

### 1. イギリスにおける教育の改革

イギリスにおける教育実情はB・サイモンの『イギリス教育史』<sup>13)</sup>やT・H・グリーン『イギリス教育制度論』<sup>14)</sup>、S・ハンフリーズ『大英帝国の子どもたち』<sup>15)</sup>、『イギリス公教育の歴史的構造』<sup>16)</sup>に見る事ができる。更に、当時の代表的人物、チャールズ・ディケンズ<sup>17)</sup>、シャーロット・ブロンテ<sup>18)</sup>、トマス・ヒューズ<sup>19)</sup>などの自伝的小説などでも検証できる。

ジョン・ロック<sup>20)</sup>の『教育に関する考察』<sup>21)</sup>やジャン・ジャック・ルソー<sup>22)</sup>の『エミール』<sup>23)</sup>に代表される様に、ヨーロッパにおける上流社会の子弟の教育は、主として当時一流と目された家庭教師によって行われるのが通常であった。上流社会の子弟のみが受けられる高等教育としてイギリスでは、オックスフォード大学やケンブリッジ大学が存在した。本来、この教育機関はキリスト教の牧師養成がその主な目的であったが、そのうち、宮廷人や上流社会の師弟をも入学させるようになっていたのである。サイモンはこの両大学が科

学の発展には貢献しなかったと述べ「いかなる専門的知識をも身に付けていないということが、優れて紳士的なのであった。……その目的は古典の勉強を通じて優雅な文芸に通じる事であった。」<sup>24)</sup>と述べている。つまり、高等教育における教育は実務につく専門職を養成する教育機関ではなく、古典の勉強を通じて優雅な文芸に通じる教育をする場所であった。

サイモンによれば教育改革は、1700年代後半に始まっている。1848年頃には、ナイチンゲールの友人であり知人でもあったオックスフォード大学のギリシャ語教授、ベンジャミン・ジョウエット<sup>25)</sup>等によって改革が推進された。又、中等教育としては宗教団体によってグラマー・スクールが開設されていたが、これも主にはラテン語やギリシャ語の教育をしていた。このグラマー・スクールやパブリック・スクールは先述した両高等教育に入る為の予備校的存在であった。初等教育としては家庭教育が主流であり、10歳くらいで両校に入学、この中等教育機関で7～8年かけて教育を受けた後、大学に入学することが許される。大学に入学しないで専門教育を受けるものは独学、または既にその職業に従事している者から、直接的にかつ働きながら見習うという方式が一般的だった。そうした教育を受けて専門職として働いていても、実質的には上流階級の者からは下層と見なされ、その実力は正当には評価されないのが現実であった。

特に労働者階級における女子教育では、読・書・算などのような基本的な教育も十分でなく、家庭内で子女教育が出来るほどにも教育されておらず、全体的に習熟度は低かった。その上、公教育も整備されていなかったのも、その教育者も養成されていなかった。1820年代には多くの私立学校が設立されたが、これらの多くは“単なる少年院”であった。グリーンによれば、この頃の個人学校では教授用の備品たるや棍棒のみといった類<sup>26)</sup>の学校であった。程度の低い教育はディケンズの自伝的小説『ディビット・コパフィールド』<sup>27)</sup>に辛らつに風刺されている。同著にはろくでなしの人物が学校教育者になっており、子ども達が日常的に鞭打たれ、虐待されていた。次に、工場の労働者として年少の子ども達が駆り出されるようになり、その道徳性の欠如から、子ども達に教育の必要性が叫ばれた。子ども達の道徳の問題から教育を開始したのは宗教家達や慈善家であり、それ

は日曜学校として開始された。

1830年ごろからチャーチスト運動<sup>28)</sup>という教育改革運動などが展開された。彼らの主張は教育が極めて重要であること、それを慈善でなく、権利として公的に拡充することが必要であるとのことであり、政治的活動として展開された<sup>29)</sup>。カール・マルクス<sup>30)</sup>は「男または女の学校教師によって十字架を持ってサインされた通学証明書が珍しくなかった。」<sup>31)</sup>と述べており、居並ぶ児童達がまったく何もしていなかったと述べている。教育者である教師自体、無学なものが多かった為、通学証明でさえ十字架のサインしかできなかったと彼は述べる。つまり、これは民衆教育のための教育者不在を提示したものである。続けて大衆教育として一度に多数の教育が実施できると評価された教育方式が出現した。教育学者アンドリュウ・ベル<sup>32)</sup>とジョセフ・ランカスター<sup>33)</sup>によって開発されたのが「助教方式」である。しかし、年長者が年少者を教育するといったその教育方式はたちまち、その教育の粗悪さが指摘されるようになった。

救貧法行政官であったケイ・シャトルワース<sup>34)</sup>は、その公教育論の中で「労働者階級を無知から解放するために、世俗的教育、取り分け政治的教育を行う事であり、それには彼らを宗教的影響下に置くことにより、宗教的、道徳的心情を啓発する事である。」<sup>35)</sup>と述べた。彼は1838年にランカスター派等の学校の有害さを指摘<sup>36)</sup>、新たな教育方法を模索する為にドイツ、スイスなどの教員養成の実際を見聞した。ドイツのワイマールには1726年頃から教員養成学校が設立され、18世紀末には30校位の教員養成学校が存在していた。1802年頃から義務教育制度が始まり、1806年のナポレオン戦争後から国民教育が開始された。当時の初代文部大臣からジョハン・ヘンリック・ペスタロッチー<sup>37)</sup>に宛てた手紙には「プロイセン政府があなたの元に派遣した者があなたの全教育方法、教授方法の精神をもっと純粹に汲み取る事を期待します。」<sup>38)</sup>と書かれており、ドイツ政府がペスタロッチーの教育方法とその精神を採用した事が認められる。

ペスタロッチーの著作『隠者の夕暮れ』の言葉、「玉座の上にあっても木の葉の屋根の陰に住まっても同じ人間、その本質からみた人間、そも彼は何であるか。」<sup>39)</sup>は“神の下の平等”思想であり、キリスト教の基本的な教義である。貧民の子を哀

れんだペスタロッチーはその子等と寝食を共にし、教育を行った。彼の教育の原理は道徳教育である。彼はその実践から“民衆教育の父”と呼ばれた。民衆教育が孤児救済の形で始まった事もあり、その教育に当たる教師には“教育愛”が求められた。そして、ペスタロッチーの思想を受け継いだフレデリック・フレーベル<sup>40)</sup>は幼児教育を開始した。このフレーベルの思想の普及に強い熱意を示したフォン・マーレンフォルツ・ビュウロー<sup>41)</sup>は、1851年にイギリスで初めて幼児教育を開始した。彼女の幼稚園にはかのディケンズも見学におとずれ、情熱を込めて描写したと『マリア・モンテッソーリ』<sup>42)</sup>には述べられている。マリア・モンテッソーリ<sup>43)</sup>も又、これら両者から強く影響を受け、モンテッソーリ・メソッドという教育方式を開発した。ヨーロッパにおける国々が、ペスタロッチーの理論による教育を実施していることに感銘を受けたシャトルワースは、イギリスでもペスタロッチーの理論に従って教員養成をなすべきことを痛感した。そして、ナイチンゲールが実際、体験したドイツのカイゼルスウェルト学園でも、看護と教師の教育が同時に行われていた。

## 2. 教員養成における教育の実験

教員養成における教育の実験は“見習い制度”で始まった。シャトルワースは1840年にロンドン郊外のパターシーで開校の準備をし、8名の貧困孤児を迎え入れ、教育を開始した。入学年齢は13歳、修業年限は一年半である。教育方法は以下の3点に特徴的である。

- 1) ハウスホルドとしての生活場面—教官は生徒と共に学園内に居住して、一家族のような家庭生活を営む間に、生徒の健全な習慣及び道徳性の形成を計る。
- 2) クラスルームにおける生活場面—入学者の学力が極めて稀薄であった為に一年は基礎教育に当てた。
- 3) 土と結びついた生活場面—労働階級の中にあつては堅実で忍耐強い労働の習慣ほど、有徳の行為に結びつく習慣はない。

……傍点筆者

教育方法は第一に、ハウスホルドとしての生活場面、即ち、寄宿舎制度によって生徒の健全な習慣及び道徳性の形成を計る。第二にクラスルームにおける生活場面、即ち、基礎教育の実施である。

労働者階級の子供たちは“読・書・算”の基礎的能力も十分ではなかったからである。最後に土と結びついた生活場面では労働階級という言葉を使い、堅実で忍耐強い労働の習慣が有徳の行為に結びつくという考え、堅実で忍耐強い労働の習慣、有徳の行為に結びつく習慣という考えは、日課表に反映された<sup>44)</sup>。その日課表は朝5時30分起床、授業開始が9時、夜9時20分の就寝まで一分たりとも自由な時間はない。また、シャトルワースは見習い生が、その見習い期間終了後の学問的知識の習得を完成させる為の場所として教育実習校の必要性を説いた。

教育者を教育すること、これは大きな課題であった。子ども達への影響力を考えた場合、大きな問題は教育者の資質である。良質の教員を養成することは真に切実な社会的問題であった。シャトルワースが教育実験であると考えた“見習い制度”による教員養成は大きな実績を上げた。マシュー・アーノルド<sup>45)</sup>は彼の教育方式を「イギリス公教育の礎である」<sup>46)</sup>と賞賛した。1847年にトーマス・バビングストン・マッコリー<sup>47)</sup>も「他のあらゆる職業から見捨てられた人、解雇された馬丁、零落した行商人、比例式の計算のできない人、地球が球か立方体かを知らない人、エルサレムがアジアにあるかアフリカにあるかを知らない人、おおよそ、我々が地下室の鍵を安心して任せようとはしないような人々に対して我々は来るべき世代の魂、わが国の自由と幸福と栄光を背負う魂を委ねてきた。」<sup>48)</sup>と述べている。シャトルワースの提唱した“見習い制度”に基づく教育方法は高い評価を受け、各地の小学校を刺激し、改革へと導いたのである。

従って、“見習い制度”は、当時のイギリス社会において最も優れた教育方法として称賛に値するものであった。そして、ナイチンゲールも看護教育草創期、“見習い制度”を採用したのである。“イギリス公教育の父”ともいわれるシャトルワースとエドイン・チャドウィック<sup>49)</sup>とはその生涯に渡る友人である。1867年から師範学校長であったチャドウィックとナイチンゲールも古い知人であり、友人であった。こうした関係からシャトルワースとナイチンゲールが直接知り合うことがなくても、チャドウィックを通じて教員の養成方法に関して知り得る事はできる。あるいはシャトルワースが教育実験である述べた“見習い制度”による教育方法は、批評家マシューに“イギリス公

教育の礎”であると賞賛せしめたことから、その教育効果に対して彼女自身十分熟知しており、参考にしたと考えられる。

又、実証主義哲学の立場から社会問題と女子教育について鋭い提言をしたのは、ナイチンゲールと陸軍の改革でコンビネーションを保ったハリエット・マーティノウ<sup>50)</sup>であった。これまで女子教育は家事程度の教育内容であり、家庭内でその役割が果たせるための教育が主流であった。女子教育の本格的な改革はナイチンゲール以降であり、主としてドロシ・ビール<sup>51)</sup>によって為された。ビールの、精神と肉体を結合する精神主義的教育は、イマヌエル・カント<sup>52)</sup>やフレーベル、ヨハン・フレディリック・ヘルバルト<sup>53)</sup>等のドイツ観念論哲学と教育学の理論によって補強され、精神的なものとの調和があった<sup>54)</sup>。

## ■ 看護専門職者教育の開始

### 1. “Professional Education”としての職業的専門教育

“見習い制度”に基づく教育方法は、当時のイギリス社会において最も優れた教育方法であり、看護教育創々期、即ち、19世紀中庸、“Professional”な職業の基本的な教育形態は“見習い制度”であった。“Professional”の“Profess”は～を職業にするとか自称する、の意味があり、“Profession”は知的操作の加わる職業の事である。従って、“Professional Education”といえは知的操作の加わる職業的専門教育の事をいう。

イギリスにおける法律を専門とする弁護士教育は、ディケンズ著『デイビッド・コパフィールド』にもみられる。同著は作者自身の自伝的小説であると言われ、実際に法律事務所のした働きの経験が記述されている。もちろん、裁判はギリシャ時代から行われており、法学は歴史的にも古い学問である。オックスフォード大学やケンブリッジ大学では早くからそれらの教育はなされたが、実際に弁護士活動に従事している者の下で見習う方式も存在したことを示している。

“医学の父”ともいわれるヒポクラテス<sup>55)</sup>に代表されるように、医学はギリシャ時代からあった。医学の大学教育は11世紀、イタリアに始まる。19世紀にはドイツを中心に基礎医学が発展した。英米医学は、『高木兼寛伝』<sup>56,57)</sup>などからもわかるようにその教育方法は臨床医学であり、患者の

ベットサイドで学ぶ臨床教授形式であった。そして、わが国は、明治維新以降、ドイツ基礎医学が中心となった発展したが、他方、臨床医学あるいは開業医の下で働きながら学ぶ“見習い制度”も存続した。

そして、ナイチンゲールが実践した看護の教育方法も“見習い制度”であった。それは、“ナイチンゲール基金による見習い看護師の訓練に関する規則”や、彼女の著作『見習い生への書簡』に『看護師の訓練と病人の看護』の中に見習い生という言葉は見る事ができる。それによれば看護師の訓練のための学校の要素は十分に組織付けられた病院と人間のかつ規律的生活をするに相応しい“ホーム”即ち、寄宿舎が必要であった。病院は看護法を学ぶ場所であり、寄宿舎は多くが人間性を養う場所である。教員養成と同じく見習い生達には規律ある日課表が作られ、厳重に監督された。同様に基礎教育では生理学・解剖学・内科学・外科学などの教科目が準備され、頻回な試験によってその知識度が評価され、実習場面や日常生活では人間性が評価された。

女性達が社会貢献できれば権利が与えられると同時に義務が生じる。そのことによって女性達に人格が与えられること、それは看護教育の主要な課題であった。そして何よりナイチンゲールはこの職業を“Professional”な職業として位置づけようと考えた。専門職の定義は『これからの看護』<sup>58)</sup>でも幾つか示されている。同著に引用されているエイブラハム・フレックスナー<sup>59)</sup>の示した専門職の定義によれば、その第一は個人の責任を伴うより知的な職業であるということである。第二は性格において学究的であり、その職の従事者は常にセミナーなどに通って新しい知識を吸収することが望まれ、第三に単に学問的・理論的であるのみならず、目的において明らかに実際的であること。第四に高度な専門的教育機関を通してのコミュニケーションが可能であること。第五に自分たちの組織を持つこと。第六に個人よりも公共の利益に対し敏感であり、合目的に到達することにより大きな関心が寄せられることなどである。

人の生存に不可欠な健康を阻害する因子それは“病気”である。私達の日常生活の中に病気の原因があるというナイチンゲールの発見は、今日、日常生活習慣病という着想の原点であり、今日の予防医学につながる。専門職の要素として日常生活における健康の概念に関わる問題である。それ

は外的環境と内的環境の変化が個人の健康問題に影響を与えるということである。それに関わるのが看護専門職者であり、その関わりは学究的である。

看護師が人々の健康問題に取り組むとき、そこには情報の収集と分析・解釈をするという知的操作が含まれる。彼女たちは、健康を阻害する原因と現れている結果との関係に関連づけ、明確に判断する。ナイチンゲールは自己の観察と経験から人々の健康に強い関心を持った。それは人々の日常生活と健康・病気との関係であり、社会現象として彼女が観察したものであった。それは、無知が病気をもたらし、病気が貧困をもたらす。そして、また、病気が貧困をもたらすという悪循環は人々の生存権の問題であり、社会悪でもあった。ゆえにナイチンゲールは女性達に健康に関する知識を伝授し、その知識で持って国民に対して健康教育を行い、もって公衆衛生の改善と意識啓発を行うことにより病気の予防ができると考えた。女性達の活動によって健康を障害した人々がその健康の回復と増進が速やかに図られ、社会復帰に寄与することができれば社会への貢献につながる。

プラグマティズムによれば我々が生活しているとは、我々が環境と作用しあって、平衡調和を保っていることであるとする。ここでは人が問題解決へとある行動を導く思考も環境との相互作用なのである。ゆえに行動と分離した思考はなく、この意味で行動は思考の一部なのである。プラグマティズムの考え方は日常生活における些細な行動でさえ、問題解決のための一つであるということである。つまり、そこには必ず思考があるということになる。高度専門職者であればそれはことさらであり、より実践が重要視される。看護専門職者が臨床実践および教育実践するとき、そこに学習経験が必ず存在する。プラグマティズムにおける教育の本質は行動が伴うということであり、より実践的である。

そして、ナイチンゲールは誰よりも“Learning to learning 学習（経験）したことから学習する”の精神の持ち主であった。ナイチンゲールは「理論というものは実践に支えられている限りは大いに有効なものであるが、実践の伴わない理論は看護師に破滅をもたらす。」<sup>60)</sup>と述べている。英語のプラクティス（実践）及びプラクティカル（実践的）という語はプラグマ（行動）と同一語源である。さすれば看護における実践とは行動を伴っ

て始めて実践することであり、その教育の本質は基本的にプラグマティズム (Pragmatism) であるといえよう。ナイチンゲールがプラグマティズムであるとの検証は筆者が既に『プラグマティズムに立脚したナイチンゲールの教育哲学—その1 プラグマティズム探求 パースの生涯をてがかりに—』<sup>61)</sup>、『プラグマティズムに立脚したナイチンゲールの教育哲学—その2 パース哲学における探求の過程—』<sup>62)</sup>、『プラグマティズムに立脚したナイチンゲールの教育哲学—その3 実践の哲学としてのプラグマティズムと看護教育—』<sup>63)</sup>で報告したところである。さすれば、看護という職業の専門性を見出すことができ、専門職としての定義との一致点は見出せるであろう。

## 2. 見習い制度による教育の実験

さて、先述したように看護教育は初めてナイチンゲールによって創設された。その教育目的は、基本的に女性の自立と公衆衛生の普及である。シャトルワースが教育の実験と述べたように、ナイチンゲールも医療の中に新しい女性のための専門職を開拓するという取り組みを教育の実験と称して開始した。

ナイチンゲールは、この事を一つの教団を設立するという方法ではなくて、生計の手段として病院看護をしようとする人々、つまり、労働によって自らの生活の糧を得ている層の厚い階層の女性達を可能な限り訓練し、組織化しようと企図したものである。よって、ナイチンゲールの行った教育実験の対象者は上流社会のみならずあらゆる階層の女性達であった。そして緻密なまでにシステムの規則を作り、その規則に同一に従い、同一の義務を果たすという激しい体制に基づき、この仕事に付く事が自分に相応しいと考えている婦人達を、先に触れた女性達と協働させるという方法によって実現<sup>64)</sup>したかったのである。

つまりは、知識は有するが行動の伴わないが上流社会の婦人達、道徳的規律の中で訓練されている修道女達、パンの為に働かなければならないがしかし、生きるために勤労意欲のある女性達を協働させることであった。彼女たちは基本的に看護師になろうという意志のある者たちに限定される。彼女たちが相互に影響しあって、これら3つの特性を具有することができれば社会に有用な一人の人格を持った女性が出来上がることになる。これは人格形成に伴う一種の実験的な試みであった。

女性達を可能な限り訓練し、組織化し、道徳的にすることはナイチンゲールが望んでやまないことであった。ナイチンゲールは、ドイツのカイゼルスウェルト学園における2週間程度の看護師としての教育体験、家族から自立後の婦人病院の監督官としての1年間の看護実践、クリミア戦争での2年間の看護実践があった。加えてドイツのブンゼン・ヨジラス男爵<sup>65)</sup>がドイツから送ってくれた、カイゼルスウェルト学園の年報や病院の衛生に関する諸外国の資料が看護教育の実際的な方法に反映されたと考えられる。彼女自身の経験と実際に行った情報収集と分析、そこには、ナイチンゲールが述べた女性の知性の開発的・実験的工夫が見られる。それは彼女が『カサンドラ』で述べた知性、倫理的な行動力、情熱をもった女性であったから為し得たのであろう。彼女が囑望した“優れた女性”とはすなわち、ナイチンゲール自身にそのモデルがある。ナイチンゲールが実践した教育の成果として優れた看護師を輩出することができれば、彼女たちは国民の健康教育と公衆衛生に寄与し、健康上の様々な問題を改善する事ができ、それができれば、女性たちは社会的に有用であるということになる。社会的に有用であることが実証されれば、女性にも社会的な人格が与えられることになる。それはエンゲルスが述べたように“社会の病気”に対する手当てでもあった。

ところが、ナイチンゲール看護に関する高邁な理想は有していたが、実践につながる理論 (theory) を有していなかった。しかしながら、ナイチンゲールは自己の経験から日常生活の中で病気が発症するという新しい発見をしたのである。ナイチンゲールの壮大な関心は、健康と病気の関係についてであり、それは明確には成されていない、がしかし、深刻な問題を提示している<sup>66)</sup>ということであった。日本に紹介されている著作『看護覚え書』は看護教育の為に書かれたのではないとナイチンゲール自身が序言で述べているが、しかし、健康的な日常生活と病気との関係について考えるヒントがある。

見習い生たちは必然的に、患者の健康が回復するまで支援していく技能を獲得しなければならない。それには通常、人々が社会において健全に生活できるという事を想定して行われなければならない。そしてその過程は成り行きではなく科学的な道程である。つまり、観察、分析、判断、具体的

支援、評価の過程を踏む。看護師を教育するに当たって必要な事はこうした看護過程を踏みながらいかに思考させるも含めた教育が必要であるということである。女性たちの能力を開発させるには良い環境の中で、経験させる事と良い教育者との相互作用に期待する事である。

### 3. 技術教育 (Skill Training)

ナイチンゲールの言葉“Nursing is an Art”の“Nursing”とはNurseにingがついて名詞化されたものである。“Nurse”とは“Nurture(養育)”が語源であり、子どもの養育あるいは人や精神を養育するという意味を持つ。彼女はこの職業に従事する者の名称をとりあえず“Nurse”と名付けると述べ、“Nursing”とは“患者の生命力の消耗を最小にするように整える事”であると述べた。従って看護教育の主たる狙いは看護法の習得にあり、技術教育である。技術にはナイチンゲールが述べた様に“art”の意味もあれば“skill”の意味もある。又、主として指先の器用さを必要とするものに多く使われる“technique”も技術という意味が含まれる。看護実践における技術はナイチンゲールが述べた看護の職業に当たろうとする者の学ぶべきA(病気の理解)、B(患者に対していかに支援するかを学ぶ事、即ち、看護法の習得)、C(看護を受ける対象の理解)があって初めて修得できるものである。

マーティノウは1860年のクォーターリー・レビューでナイチンゲールの『看護覚え書』について多くの論説をしている<sup>67)</sup>。マーティノウによれば、国民の半数である女性達に向けて書かれたその本は、看護を科学に基づいた芸術(art)である<sup>68)</sup>と言わしめるに十分であるとのことであった。筆者は既に“art”の持つ意味について『看護教育における思考訓練の重要性—デューイの『How we think』てがかりに—<sup>69)</sup>で検証した。看護師の“おや?”という直感、この直感が対象者のささいな変化をキャッチする。次に看護師はニーズ把握のために言語的・非言語的に患者の変化の裏付けのための情報を収集し、集められた情報は分析・解釈される。それは直感から分析的思考の段階は、看護実践における患者の健康上の問題解決のための過程であり、一つの思考過程である。

まず、病気の理解ということであるが、ナイチンゲールは病気というものは、その経過のどの時

期を取っても程度の差こそあれ、その性質は回復過程であると述べている。その回復は人間が持っている自然の治癒力であり、回復力である。その自然の力が遺憾なく発揮できるようになるまで、明るい陽光と新鮮な空気で室内の環境を整え、生命維持のために体の衰弱を最小限にする事が看護である。呼吸が苦しいとき、何故患者は横になれず起き上がってしまうのか?この現象を観察した知恵のある看護者であれば、レントゲン写真で呼吸野の状態を確認することができなくても、または、聴診器で気道あるいは肺野の空気音を聴取する技術がなくても、起き上がることによって酸素を十分に取り込むことができ、患者の呼吸が楽になるという経験を実践の中で持てば、呼吸を楽にするために上体を上げ、体力の消耗を最大限防ぐための安楽な姿勢を保つ手段を講じるであろう。その意味づけは後から成されても良い。疾病の理解のための学習はここから始まる。

人が病気になること、それはその人の社会生活において重要な問題である。看護を行おうとするものは、その活動が人の健康や公衆衛生、病気の治療等に関わるがゆえに専門職として位置付けられるのである。従って、看護婦は人の健康を阻害する因子、病気、この病気に対する専門的な知識が必要である。正しい知識として、人間の体のメカニズムがどの様になっているのか、その機能がどの様になっているのかを知ることは、看護の中で実に重要な部分である。健康な人の身体を骨格や神経・筋肉といった生物学的側面から知り、更に血液やホルモン・水や電解質等の生理学的側面の理解、更に食物が摂取された後、身体内部でどの様に消化・吸収・排泄がなされるのか、取り込まれた食物が身体内部でどのように化学反応を起こして処理されていくのか。つまり、身体内部の生化学的側面の理解は人間のからだに正常に機能するための必須の要件である。この機能が病気によって障害されたとき生理学的にどの様に変化し、その変化がどのような現象として現れ、その現象を個人がどのように知覚し、そうした身体機能の変化が、私たちの日々の生活にどのように影響を与えるのかを知らなければ回復に向けての援助はできない。

次に看護法の習得である。ナイチンゲールは“理論と実践の一致”が基本的な方針であったから、看護に関しても臨床で患者にいかに支援するかを学習することが重要であった。ナイチンゲールは、

看護とは「患者の生命力の消耗を最小にするように整える事を意味すべきである。」<sup>70)</sup>と述べ、病気状態にある患者の体力の消耗が最小限になるよう食事や水、空気や陽光、清潔や排泄といった基本的なニードに関して充足できるよう整えることであると述べている。ニードの充足のための支援、それはつまり、人々の健康が回復できるように支援する事である。しかしながら、現実には看護教育は未着手であり、その看護の適切性は確信が得られずともすでに病院の中で健康問題を抱えた患者の看護は実践されている。そこでナイチンゲールは見習い生たちに患者に引き起こされている現象を克明に観察させ、その一連の過程を記録し、分析するという手法を取らせた。その手法は帰納的で科学的である。多くの事例から患者の発症から回復の過程を観察させ、どのように援助すれば患者の体力の消耗を防ぎ、回復を促進できるのか？そうした一切の記録は一つの法則性を導き出すことが可能となる。それは看護学を実践の科学として発展させるに相応しい手法である。

ナイチンゲールは「患者についての観察から始めなさい。最初に患者を見た瞬間から、もう観察は始められているのです。いやそれどころか、まず看護師に厳しく要求されることは、病人の観察なのです。」<sup>71)</sup>と述べている。『公辞宛』によれば観察 (observation) とは物ごとを注意深く見る事である。ナイチンゲールはこの観察から得られた現象を記録し、この観察から次に起きる事を予測し、その予測に基づいて予防対策をする事ができれば合併症などから患者を救い、余分な苦痛を味あわせることなく回復に向ける事ができると考えたであろう。この観察を基にして得られた事実を理論的に体系付けたものが科学 (science) と呼ばれるものである。science は又、技術・技 (skill) とも同義語である。人間の生命にとって必用不可欠な原則が阻害されていないかについての観察は、どう支援するべきかの判断の根拠につながる。つまり、観察を十分にすることによって患者の状況が認識でき、理解できるということである。その事ができれば患者の健康上の問題点が抽出され、次のステップでは看護支援への具体的なプログラム立案が可能となってゆくのである。そしてその際には身体的な側面のみならず、精神的な側面にも注意が払われる。患者がいかにすれば落ち着いて療養に専念できるのか、ナイチンゲールは健常人がいかにして自分の精神を落ち着

かせているかを参考にしながら、それができない患者にどうすれば変化を持たせて精神を安定させられるのかを考える事こそが、看護師に与えられた任務であると書いている。

最後に、看護を受ける対象の理解である。ここには人間の尊厳の問題がある。医師が病気そのものの回復に向けて治療するとしたら、看護は病気を持った人をケアする。ナイチンゲールが看護をあえて“art”であると述べた理由は、看護の対象が人間であり、その生命への働きかけは、芸術家がキャンパスに生命を与えると同じように看護が人々の健康維持に貢献することができれば、それは人々の生命維持に貢献することになる。貴族中心社会であった当時のイギリスでは、全ての人が平等ではなく、人として尊重されなかったことは、ナイチンゲールの時代の社会的事実である。彼女はある教区で小学校の校長に任命された老人の採用理由が「豚をかえなくなったからであった。」<sup>72)</sup>と記述しているが、これも当時の労働者階級への差別や侮辱の程度を示す。兵士たちもそうであったが、労働者階級の者たちは人間扱いされなかったのである。であるから病院の状況は『病院覚え書』<sup>73)</sup>、病院看護の実態はディケンズの『マーティン・チャズルウィット』<sup>74)</sup>に明らかである。健康障害による内面的な変化はその侵された肉体のみならず、精神をも侵し、病気の回復を遅らせる。又、内面的に傷付いた精神はその肉体をも消耗させ、人の生命を危機的状況に陥れる。ナイチンゲールは自己の経験からもこの事を知っており、「医学においては精神の治療より肉体の治療が重視され、更に、自然科学である医学は低い地位に在り、更に精神の科学はもっと低い地位に在る」<sup>75)</sup>と述べている。同時に彼女は、医学では精神的な治療より身体的な治療が重視され、更に、自然科学である医学は低い地位に在り、更に精神の科学はもっと低い地位に在ると述べた。

病気を持った人々の精神的ケアは、高度な知識と技術、その受け手である対象の理解が必要であり、看護専門職者の能力開発が必要である。それには看護の対象が人間であるとの認識とそのために必要な人間関係構築が基盤となる。そこには他者理解と他者尊重がある。

一般に人間関係にはコミュニケーション技術が必要となる。我々は相手が怒っているか笑っているのかを相手の顔の表情から察する事ができる。このコミュニケーション技術は、人間関係構築と

いう事のみならず、患者のニーズ把握に必要な高度な技術なのである。経験の積み重ねによって得られた一つの系統だった理論は、我々に効果的なコミュニケーションを教えてくれる。看護における技術教育もそれと同じ事がいえよう。無からの出発はやはり経験に学ばなければならない。しかしながら、人間の健康的な生活を考えるとおよそ、人間とはこうあるべきという一つの法則性がある。子どもが生まれた時、人はその子が成長するまで必然的に養護をするであろう。その養護は人の基本的要求に関する事である。養護がなければ恐らく幼い子どもたちは生存し得ない。しかし、こうした社会の構造的な部分も通常は、集団における教育というよりは、家庭内で親から子へと口こみで伝達され、また、子ども達も親の行為を模倣するといった方法で成されていた。それは成長・発達段階における様々な局面で、意図的あるいは無意図的に行われる有形・無形の教育的関わりによる。

看護実践における技術はA（病気の理解）、B（患者に対していかに支援するかを学ぶ事、即ち、看護法の習得）、C（看護を受ける対象の理解）があって初めて修得できるものである。要するに看護は“頭と手と心”の一致があってはじめて看護が一つの行動として形をあらわす。知識は頭であり、手は技術、心はその名のとおり、血の通った人間としての真心である。これら三つが判断能力の高い実践的看護師へ変容させ得ることが可能となる。

#### 4. 人格 (Character) 教育

“Nursing is a character”の持つ意味、それは全女性の人格に関わる問題でもあった。人格とは道徳行為の主体としての個人、自立的意志を有し、自己決定的である個人の事を言う。言葉を変えて述べるなら、社会に適応できる人の事をいう。社会へ適応できるという事は自分の力で“生きる”という事を意味し、その為には精神的にも経済的にも自立していなければならなかった。つまり、女性たちが社会的に“自立する”という事は一人の人間として自身の人生設計と、その設計に基づいて行動すること、そこには意志決定が存在する。女性たちが自身の力で生きていけるということを社会への適応を意味する。その為に女性を訓練する事、これは一大改革であった。社会規範もさる事ながら上流階級から下層に至るまで当時の

女性達は無知であり自立できていなかった。勤労と責任という意味合いも込めた職業教育を通し、社会に適応し、その実践を通し、個人としての自己実現が計れる女性、問題解決能力あるいは意志決定力を持つ女性の育成は重要な課題であった。そして、人格の問題は、職業的人格も含まれる。新しく創設された看護が医療の中で医学とは違う一つの専門職としての独自の機能を有するかどうかの問題であり、それは看護実践の中で、いかに支援をするかの意思決定を看護師自身が判断できるかどうかという問題をも示している。

ナイチンゲールは“優れた看護師は優れた女性”であると定義し、優れた女性とは自分の持てる最上のもの、即ち、知性、倫理、実践のすべてに置ける最上のものを患者に惜しみ無く与える女性のことだと述べた。ナイチンゲールが述べた知性とは何をなすべきかがわかり、判断できる能力である。そこには倫理的行動につながる内面的要素がある。

既にシャトルワースは貧民階級の子を集めて“見習い制度”によって教員養成を開始し、その成果を上げていた。教官は生徒と共に学園内に居住して、一家族のような家庭生活を営む間に、生徒の健全な習慣及び道徳性の形成を計るという事、労働階級の中にあっては堅実で忍耐強い労働の習慣ほど、有徳の行為に結びつく習慣はないという基本方針である。単科大学や専門学校に使われるカレッジ (College) という言葉の語源はコレギウム (Collegium 寄宿舎) であり、もともと教育における貧民学生の救済制度として発足したものである。この方法が教育効果を高める方法であるとして、当時のイギリスの有名大学であるオックスフォード大学やケンブリッジ大学等でも寄宿舎制度を採用していた。ナイチンゲールは当時最低な状況にある女性達を、自分の考えている極めて高い価値規範を引き上げる為に、規律を中心とした寄宿舎制度を導入した。これは彼女が「寄宿舎は身体健康や技術的かつ理論的な学習の為ばかりでなく道徳的かつ精神的な生活の場でもある。」<sup>76)</sup>と述べた言葉からも理解できる。

ナイチンゲールは自分の体験からもこの事を知っており、個人を規則によって外的に規制しながら、キリスト教の理念を指標とし、寄宿舎による精神性の高い教育で内的にも規制しようとした。ゆえに、寄宿舎は看護師の品性を高め、規則正しい生活をするためになくてはならない教育の

場でもあった。寄宿舎の「環境は道徳的で宗教的かつ勤勉で節度ある上に朗らかな調子や雰囲気満ちている。だから、どの階級の若い善良な女性が入ってきて心身の健康を損なうような心配のない一つの“ホーム”として訓練学校と病院とが運営されている。道徳的で精神的に高める援助があり、慈しみに満ちた母親の様な気遣いが全てに及んでいるので、全体が優れた女性達を訓練し、誘惑を退けさせ、現実と与えられた仕事に取り組む事ができる状態」<sup>77)</sup>に整備する必要があった。寄宿舎を女性達の心身を教化・訓練する場になるよう道徳的な雰囲気に設定し、その環境の中で女性たちの心身が健やかになれるよう、母親が子ども達に愛情を注ぐ家庭と同様に精神的な安らぎの場になるようにした。彼女は自分の体験したカイゼルスウェルト学園のキリスト教的愛の優しさや、明るさや、繊細さ、あるいは道徳的雰囲気を高く評価しており、そうした環境の中に見習い生達をおきたかったのである。彼女の女性としての生き方はキリスト教を基盤としたものであったが、実際には既存のキリスト教的教義の枠を越えていた。それは看護の教育がキリスト教の伝導者養成ではなく、キリスト教の理念をその活動の指標としながら、弱者救済の立場にたてる看護専門職者を養成する事である。しかもそれは明確に報酬を受けるに相応しい職業的自立心のある女性達に作り替える事であった。

ナイチンゲールは1858年の『平時および戦時の陸軍病院へ女性による看護を導入する件に関する補助覚書き』の中で規律の有効性に関し次の様に述べている。「軍人と言うものは、様々な欠陥を持ちながらも規律の習慣と精神とによって造り上げられたものであり、それは本能や第二の本性ともなり、それが持って生まれた人間性を高めているのである。試みに規律を緩めてみるが良い。しかも一般人と同程度に、軍人には普通の人間と同程度あるいはそれ以上に野獣の本能が残るのである。」<sup>78)</sup> ナイチンゲールのこの考えは生来、本能的に持っている悪い習慣でも、ある一つの外的規制によって個人の行動が涵養される事を示唆したものと考えられる。即ち、ナイチンゲールは個人の中に内在している暴君的で動物的な本能も、規律によって制御することが可能になると述べているのである。規律は外的規制であり自己制御につながる。ナイチンゲールは、この規律の精神を多くの規則によって実現しようとした。彼女は、看

護を志向する者は「自己を統制する力を見につけ、自己のうちにより高い理念を育むこと」<sup>79)</sup>が必要であると述べている。“自己を統制する力”とは即ち、理性である。その理性教育こそがかつてウルストクラフトが『女性の権利の擁護』<sup>80)</sup>で主張したことであった。女性達が男性同様、理性的になれるように教育されること、それはナイチンゲールが度々述べた“第2の天性”を作るための教育であり、その為には軍律にも似た規則が必要であった。彼女はキリスト教における神の権威において規則を作り、彼女の権威において看護師達に実践させたのであった。

これは単に女性たちを寄宿舎に入れたという事のみならず、徹底的にその精神に鞭打った働きかけをしたという事の証しであろう。評判の悪い看護師をナイチンゲールが考える知性・道徳ともに高い看護師に造り変えるためには、こうした徹底した矯正が必要だったのかもしれない。少なくともナイチンゲールは、女性達を軍人のような規則づくめの生活におき、規律の習慣を持たせ、規律の精神によって行動変容を起こさせ、不徳な女性達の特性を有徳な“第2の性”として形成させようと考えた。

フランスの社会学者エミール・デュルケーム<sup>81)</sup>は「我々に優越するものとして認められる一切の道徳力を我々の上に振るう所の支配力である。」<sup>82)</sup>と述べ、この支配力を持つ権威に値する概念が規則であると述べている。その上でデュルケームは、道徳性の第一要素は規律の精神であり、第二は社会集団への愛着、第三は自律性であると述べている。先述したように規律というものは権威を受け入れる力であるから絶対服従を意味する。それは自己の欲望を制御して、自己を律することに繋り、すべて捨て去る事になる。これはまた、キルケゴールが述べたキリスト教的隣人愛が自己犠牲や献身という形や社会への奉仕という形で表出されるようになる。道徳という概念をこうした形で分析すると、彼女の述べた女性達を社会に有徳とする事は、即ち、規律の精神と犠牲的精神でもって、自己を律し社会に奉仕することを意味していたのである。

他方、ジョン・デューイ<sup>83)</sup>は人格について、「教養は人格的なものである。」<sup>84)</sup>と述べた。つまり、人格は教養であるとも言える。教養とは、絶え間なく、意味の認識の範囲を拡大し正確さをまして行く能力であるとしたならば、教養の高さはその

人の視野の広さや豊かさを示す尺度であり、人格教育が単に知識の深さだけではなく、物事の意味を解釈する能力を持ち、自分がどうするかを判断する自律的意思を有するということになる。それは人間として男女の性差を問わないものであり、職業的な差異があるものでもない。看護教育が人格教育を主眼としたものであるとしたら、寄宿舎による強制的な性格強制より、その専門性と合わせた幅広い教養教育も大切になってくる。

## ■ “見習い制度”における教育作用

デュルケームは“教育とは作用である”と述べている。この言葉に従えば“Nursing is process”と言い換える事ができる。“process”という語は“過程”とも訳されるが“作用”という意味も持つ。今日の看護界では“看護過程”という言葉が日常良く使われており、看護教育の主要テーマでもある。看護過程を知的作業を伴う一つの技術(skill)として捉えながら、ナイチンゲールの“見習い制度”における教育作用を検討するのも意義深いものであろう。“見習い制度”はその実践教育を病院に置き、人格教育を主として寄宿舎に求めた教育であり、実践を伴う“知”の統合である。その教育はまず良質の環境が準備され、その中で経験し、感化され、更に激しく訓練されるという。そこで、“見習い制度”の教育作用について経験・感化・訓練の側面から検証する。

### 1. 経験 (Empirical)

ナイチンゲールは経験の概念に関して確証は持っていなかったが、経験が観察や実験によって示される一定の性質を持っており、極めて一つの法則性となり得る概念である<sup>85)</sup>と考えた。ここにはアメリカで花開いたプラグマティズムの思想がある。“Empirical”は観察や実験を基にした経験のことであり、“Experience”と同義語である。ナイチンゲールの多くの提言は自己の経験からであった。デューイは“Experience”を経験の概念として説明したが、ナイチンゲールは経験の概念を一つの法則として考えていたが確証を持っていなかった。“Empirical”のEmは内に向けることであるが、“Experience”のExは外に向ける事である。“pirical”と“perience”の語源はperiri (=try)である。ゆえに“Empirical”と“Experience”とは同義語である。

一般的に自然法則は経験の法則としての性格を持っているといわれている。法則 (Law) という考え方はヨーロッパを起源とする近代科学の考え方であり、自然界の普遍的な現象を言う。デューイは“経験”と学習の成立過程について「教育とは経験を絶え間なく再組織ないし改造する事である。」<sup>86)</sup>と述べ、経験が外界に働きかける活動の一種であると述べている。その活動が外界との相互作用によって、均衡が保たれているときは反応として現れ、保たれていないときは反動として現れる。日常生活における活動は、その人の具有する知識、能力に適切な課題を与えて経験させ、その連続が経験学習である。そして、経験はその人の行動を方向付けたり、統制したりする。そうした経験が個人の内部に蓄積されると、その連続によって学習が成立し、その経験を間断なく再組織したり、再改造したりする。その経験が個人に内在されると、同じような状況に遭遇したとき、過去の経験から次なる事象が予測でき、先行経験を踏まえた判断によってより適切な行動を為すことができる。

人の訓練のための“場”、即ち、環境から学ぶという経験学習の有効性は誰よりもナイチンゲールが経験していた。ナイチンゲールは見習い生達の能力が健やかに発達するように、その周囲の環境を整備する事を重要視した。ナイチンゲールの教育思想はデューイの教育思想と一面類似したものを持っている。それはイギリスのフランシス・ベーコン<sup>87)</sup>に始まる経験的認識論による経験哲学 (Empirical philosophy) が、ロックを経てアメリカのデューイに引き継がれる。デューイの経験の哲学はパースの提唱したプラグマティズムとしてアメリカで開花した。ナイチンゲールもまた、ベーコンの経験的認識論を素地としたイギリス哲学界の思想家の影響を存分に吸収できる環境にあった。

ルソーは「植物は栽培によって形成され、人間は教育によって形成される。」<sup>88)</sup>と述べている。彼は植物と人間、栽培と教育を対比させながら、人の教育と植物の栽培との類似性を強調し、その教育は自然、人間、事物によって行われると述べた。自然の教育とは個人の内在する能力の内部的発達の事をいう。個人に内在する能力をどう使うかを教えるのが人間であり、人間の5感に触れる教育が事物の教育、即ち、経験である。

ルソーが述べたように人間に自然が与えた能力

を、その発達が健やかに促進されるように教育するのは人間であり、その周囲の環境が人間に経験を与えてくれる。しかし、この経験が厳選されたものでなければ教育効果を高める事はできない。自然界の事物から学ぶという事は与えられた困難に対して自ら対処する能力を養うという事でもある。もちろん、既に経験済みの人間から積極的に学ぶという事もできよう。“急がば回れ”の諺のようにある事柄に対して“なぜ?”という疑問が生じれば、その疑問の解決に努力するであろう。こうした経験は先人から与えられた答えよりも貴重である。その意味でルソーは消極的教育の立場を提唱している。ルソーの消極的教育とは物事のつめこみ教育ではなく、被教育者の自然的能力を妨げるべきものの排除である。知的早期教育の否定、徳育と体育の重視などであり、まずは人間たれと説く彼の教育観は事物から学ぶという立場であり、その立場において教師の役割をどこに位置づけるかという課題も生じる。

デューイも「環境から離れて教育することではなく、生まれつきの能力がよりよく利用されるような環境を用意する事なのである。」<sup>89)</sup>と述べている。つまり、教育は環境との相互作用によって個人が学習（経験）したことから学習するのである。その為には良質の環境と良質の教育者が必要である。

## 2. 感化 (Influence)

『教育学辞典』によれば感化 (influence) とは教育的人間関係の根源的在り方を示すものであって模倣 (imitation)、同一視 (identification)、感情転移 (transference) 等の概念では解明し尽くされない言葉であり、本質的には概念の固定化はまだ十分には行われていないと記述されている。中でも同一視 (identification) はシグモント・フロイト<sup>90)</sup>の精神分析理論でも説明付けられている子どもの初期の学習形式である。同一視は個人が家庭のような小単位の学習形態、あるいは学校などのような集団の教育環境の中で他者の行動様式・態度・感情・思考を自己に取り入れ、わがものとする規制をいい、同一化とも呼ばれる。

人は好むと好まざるに関わらず他者の影響を受けている。道徳的な環境におかれる、あるいはそうした環境下における人的影響は計り知れないものがある。一般的に教育実践する場合、他者の支配あるいは規律などの外的規制によって動機づけ

られるのではなく、内的規制によって自己啓発ができるように動機づけられなければならない。看護師になろうとする見習い生たちに看護の本質を良く見極めさせ、それが具有できるようにする為には、その個人が有している最上の能力を最大限発揮させ得るような教育的環境を準備することであり、その環境の中には、個人を動機づけ、軌道修正できる良質の教育者が必要である。“見習い制度”による教育方法はその教育の理念が達成されるような環境と、こうした環境をより良く調整し、個人の良質の能力が最大限発揮され、開発できるように指導する人物が必要であった。その教育は“門前の小僧、習わぬ経を読む”式のものではなく、教育環境の整備が十分になされ、教育を受ける者たちが互いに影響されあうように意図的に計画された。

ナイチンゲールは看護師の教育には立派に組織された病院が必要であると述べている。これは見習い生達が患者に対していかに支援するかを学ぶ唯一の教育環境であった。その環境が良好であるべきなのはあらためていうまでもない。それは技術教育を受ける病院、あるいは寄宿舎にしても同じであった。ナイチンゲールは「優れた女性や完全な看護師が新しい見習い生に及ぼす感化力には口では言い表せない程のものがああります。」<sup>91)</sup>と述べている。彼女はあらゆる階層の女性たちが共働する事によってより良く影響し合うことを期待した。ナイチンゲールが述べたように、教育では良く感化される事が大切であった。

子どもの発達過程は身近な人に同一視し、模倣学習によってその人達の行動や感情を身に付け、共感性を養っていく学習過程であり、近年では心理学者などによって実証されている。感情転移 (transference) は例えば、幼少期の家庭生活に於いて関わりの深かった重要な人物即ち、父母等に抱いている感情を、他の類似の人物に向ける事をいう。例えば、父親を憎んでいる生徒が教師に不従順であるとか、父に甘えたかった娘が初老の男性にひかれる場合などである。子どもが嫌いと言明してはばからない者の中に（本人は意識していない事のほうが多いのだが）、親子関係が著しく悪い場合がある。これらも子どもを媒介にした親に対する感情転移であろう。教育の現場でこの無効な感情転移現象を見極めたら、逆感情転移を起こさせるように努めればよいことになる。

看護技術修得に関する日常的な問いは、“百聞

は一見にしかず”の諺が示すが如く、技術教育においてモデルを示す教育は学習者のイメージ付けにつながり、決して廃れることはない教育方法であるとの見解を導き出させる。かつてジョハン・アモス・コメニウス<sup>92)</sup>は直観教授 (object lesson) を提唱した。彼の名著『大教授学』<sup>93)</sup>には、技術教育についても論じている。彼の説く直感教授が実際に見せる方法であり、技術教育におけるモデル学習である。彼の時代は16世紀のことであり、実に古典的であるがしかし、古典だと一笑すべきではない技術教育の本質がそこにあると筆者は考えている。

ジーン・ピアジェ<sup>94)</sup>によれば模倣 (imitation) とはモデルを再生する行動である<sup>95)</sup>。1920年代にジュネーブにあるルソー研究所では、ピアジェの子どもの観察方式が、子どもの思考の世界における研究となった。この観察の対象となったのがモンテッソーリ・メソッドによる“子どもの家”である。ピアジェは後にこの研究所の所長となっている。ピアジェは子どもの発達段階を第一段階から第六段階に分けて説明している。その第一段階が感覚運動期であり、聴覚・視覚などの5感で得られた情報を、模倣するという段階である。子どもは簡単な模倣から複雑な模倣へ進み、自分の活動のシエマ (= 人の心的構造) を分化させ、新しい活動のシエマを獲得することが学習の手段となる。更に高度になると頭の中で対象や活動を再現する事ができ、過去に経験した事のある現象が、現在目の前に無くても模倣する事ができるようになると説明している。感化という言葉が同一視であれ、感情転移であれ、模倣であれ、どの様に説明付けられたにせよ、感化という言葉の概念付けが十分に付いていないと言うことはつまり、この3者に類似した意味合いがあるという事もできるであろう。この様にその影響力のある人物からの教育的働きかけの効果は計り知れない。つまりは教育的影響力のある人間の存在が必要であるという事である。

デューイは「ものを成就する手段の模倣は、理知的な行為である。それは綿密な観察を要し、既にやろうと試みていることをもっと旨くできるようにするものを選び取る賢明な選択を要するのである。」<sup>96)</sup>と述べている。デューイを引き合いに出すまでもなく、『風姿花伝』<sup>97)</sup>にも代表されるように、わが国に於ける伝統的な踊りの世界や能や狂言といった芸能の世界における教育では、日

常生活における現象を観察によって会得し、一つの形に表現する。模倣は教育をする側、受ける側が、その目的を十分承知で行う意図的なものであるならば、これは言葉をつかうより効果的なものである。つまり“感化”による教育効果である。個人の内在する能力が、ある時期、一齐に花開くということはなく、個人の能力の出現がその個人によって異なった出方をするという事は子ども達を良く観察しているものなら、当然気がつく事象である。

こうした事の積み重ねが模倣学習であり、人の極めて原始的な学習形態である。看護師の教育はまさに開始された。つまり、人でいえば産声を上げたばかりである。生まれたばかりの看護教育は、乳児期初期と同様の段階であり、模倣学習はかなり効果的であったろう。その訓練過程が一連の経験となって個人が一つの技能を獲得するのである。しかしながら、人の成長も模倣する段階に止まらない。一つの模倣学習が終了したら理論的に意味づけする抽象的段階に入っていく。未熟なままで固定化された場合、人は成長できない。看護教育も同様に模倣学習の段階を存続する事のみに拘った場合、それは悲惨な結果を招くことになる。

### 3. 訓練 (Discipline)

今日の看護師の教育はだれもが教育 (Education) だと言う。『広辞苑』によれば、教育とは教えること、人を教えて知識をつけること、人間に他から意図をもって働きかけ、望ましい姿に変化させ、価値を実現する活動であるとされる。“Educate”の語源はラテン語の“educare”であり、その原義は卵をかえしてひよこにするとか、児童の優れた能力を引き出すことの意味で使われるのが一般的である。又、“educare”も“to educate”の意味で用いられるが、これは主として肉体的な養育に対して使われるのに対し、“educare”の方は精神的な意味で用いられた。ナイチンゲールの準備した教育はいわゆる教育というよりも、彼女自身が激しい訓練と述べているように訓練、訓育、陶冶 (discipline) である。ナイチンゲールは「看護は一つの芸術である。そしてそれを芸術であらしむるには画家や彫刻家の仕事と同じように、他を顧みない専心と激しい準備が必要である。」<sup>98)</sup>と述べている。

ナイチンゲールは看護を芸術であると定義し、

その為には激しい準備、即ち、訓練が必要であると述べた。一般に一つの技能を獲得するためにある一定期間に行われる実務的な教育は訓練 (training) と呼ぶ。ナイチンゲールは“training”の過程において経験や感化力の効果を期待したが、とくに彼女は訓練のもたらす教育効果を重要視した。看護師という最高芸術家を生み出す為“訓練”，これこそがナイチンゲール式教育の神髄である。ナイチンゲールは『看護師の訓練と病人の看護』の中で「Discipline (訓育, 訓練, 規律)こそが訓練 (training) の本質である。」<sup>99)</sup>と述べた。そして、訓練とは何が成されねばならないかだけでなく、どの様に成すべきかをも教える事であると述べ、看護師がどうあるべきかについて、又、どう教育されるべきかについて詳しく述べている。Discipline の語源はラテン語の disciple (学ぶ) であり、多くはキリスト教に象徴されるように、戒律や規律によって人格の陶冶を目指す精神修養の事をいう。これらは修行僧が自己自身に過酷な苦行を強い、身体的・精神的限界まで自身を追い込むことによって悟りを開く世界のことである。Discipline (訓育, 訓練, 規律) の効用に対しミッシェル・フーコー<sup>100)</sup> は身体への服従との見解を示す。歴史的にフーコーが述べたがごとく、discipline (訓育, 訓練, 規律) は修道院の中に、軍隊の中に、そして仕事場の中に存在した<sup>101)</sup>。そして、これらの考え方が修道僧や軍人や職人に適用されるとき、時間割での行為の磨き上げが成され、服従的な精神・身体を作り出し、その能力を一部解離させる。がしかし、他方ではその能力の増大を成すという結果もでる。従って、“training”の意味する実務的な技術訓練とは分けて考えなければならない。がしかし、その精神においては類似性を有する。

ナイチンゲールは“discipline”が子どもを鞭打って教育してきた代名詞の様に考えられてきたことを否定しながら、“discipline”が決してそのような教育方法ではなく、道徳的、身体的、精神的な能力を最大限高めようとする働きかけであるとして、自然の法則の中で、その秩序や方法を正しく理解して行く力を持つようにするためのものであると考えた。それはナイチンゲールの「訓練とはあなた方の中にある財産をあなたがたが活用するようにすることなのです。」<sup>102)</sup>と述べた言葉から理解できよう。ナイチンゲールが述べたように“discipline”は個人の能力を最大限高めよう

とする働きかけであり、その秩序や方法を正しく理解する為の方法なのであった。つまり、教育が望ましい形に変容させるといった外形的な形成作用であるとしたら、訓練は本人に内在する能力を最大限発揮させることにある。デューイはその発芽の瞬間を捕らえ、鉄は熱いうちに打たなければならない<sup>103)</sup>と述べた。子どもの能力がまさに開化しようとする瞬間を、教育する側が見定めるには、かなり高度な能力がいる。その時期に達してもいないときに特訓しても効果は上がらない。まさにその一瞬の教育が必要なのである。その事によって習性が固定化される。今、真に子どもの発芽の瞬間をとらえて教育できる人物の存在は、個人の教育に必要な存在であり、更にこれに同一視あるいは模倣する人物が存在すれば、教育における言葉は少なくて済む。

デューイは学習の成立に必要な内的動機づけともなりえる“興味と訓練”との考察において、自分の行動を良く考え、熟慮の上で行動にとりかかるように仕込まれている人は、それだけ訓練されているのである<sup>104)</sup>と述べ、訓練というものは個人がどう行動するかを熟慮する為に必要な教育であると考えた。さらに、こうした訓練によって得られた能力は、混乱や困難に直面してもなお、賢明に耐え続ける強い意志力を持たせることができるものであると述べ、訓練とは、意のままになる力、つまり、企てた行動を貫徹する為に有効な手段を使いこなす事を意味するのである<sup>105)</sup>と述べている。ゆえに、この訓練という言葉は、手作業的な日々の単純な訓練ではなかったことは明らかである。更に、デューイは習慣の外面的効率、思考を伴わない運動的熟練を達成するために、機械的な決まり切った作業や反復練習に寄る近視眼的な方法は、周囲の事物によって成長を故意に閉じ込め、制限していることをもの語るのである<sup>106)</sup>と述べ、訓練の持つ意味を機械的な決まり切った反復練習という意味から分けて考えている。反復練習は経験の積み重ねとその蓄積という意味で確かに効果的である。しかし、この反復練習は単に決まりきったことをするのではない。常に自己の技能を評価し、次へのステップにする。そこには技能を高めるための“批判的思考 (critical thinking)”がある。訓練の持つ意味は、自制力や制御力を持つといった意味合いもあり、人格の陶冶といったようなかなり厳しい意味を持つものである。

また、カントは訓練又は訓育は動物性を人間性へ変えていく<sup>107)</sup>と述べている。彼は「教育を立案する人達は、人類の現在の状況ではなく、将来より良き状況に適合するように、言い換えれば人間性の理念とその全本分とに相応しく教育さるべきである。」<sup>108)</sup>と述べたが、看護教育にもこれと同様な事がいえる。社会の変革の中でしなやかに変革し得る教育が今後の看護教育の課題であろう。しなやかさとは可塑性であり、可塑性とは先行の経験から後続の活動を修正する諸要素を獲得して保持し、持ち越す能力である。一つの経験から次の行動に至るまでの過程で一つの要素を獲得したらこれを保持し、更に新しい場面では、先の経験を踏まえた上で行動の軌道修正ができるという事がしなやかな対応である。

## ■ おわりに

看護とは、“Nursing is not an Art but a Character”であると述べたナイチンゲールは“優れた看護師は優れた女性”であると述べ、優れた女性は、その知性、倫理、実践において最上のものであると述べた。看護に対する高邁な理想を抱いたナイチンゲールが実践した教育方法は見習い制度であり、現在、徒弟制度を連想させるに相応しい教育方法であり、もし、その教育で彼女の理想が実現できたとしたら、その教育作用はいかなるものなのか非常に興味深い問題である。そこで、本論では、イギリスにおける教育の実情とその教育改革運動も含めながら、ナイチンゲールが実施した“見習い制度”が、彼女が目指していた教育目的に即していたのかどうか、あるいは、その教育の作用は彼女が求めていた看護師の育成に適ったものであったのかについて検討を加えた。

“見習い制度”は当時一流とされた教育方法であり、それは、経験・感化・訓練の効用を期待し、その職業に必要な技能の獲得と人間的な成長を目指すものであった。経験学習の有効性は誰よりもナイチンゲールが経験していた。経験とは外界に働きかける活動の一種であり、その活動が外界との相互作用によって均衡を保とうとする。この経験の蓄積と経験の更新によって学習するというものである。また、他者から学ぶという点では協働することによってより良く影響し合うことが期待された。訓練とは個人に内在する能力を最大限発

揮するための働きかけであり、人格の陶冶といったようなかなり厳しい意味を持つものである。よってナイチンゲールの教育実践では、まず良質の環境が準備され、その中で経験し、感化され、更に激しく訓練されるという教育作用を十分に意識し、意図的に教育計画されたものであった。そのことにより、ナイチンゲールが構想した看護専門職者に必要な知識・技術を具有させることができ、かつ人間性の向上をめざすことが可能となったのである。“見習い制度”の持つ教育作用、すなわち、それは実践を伴う“知”の統合である。その教育効果は大きく、単に思考を伴わない機械的な反復練習や無意味な束縛といった徒弟制度的な方法ではない。

医療の分野で新しい職業として、看護職を発展させるにはその独自性が主張されなければならない。それは医学的管理と対応できる様なあらゆる水準の健康に関する働きかけである。人間の一生を考えた場合、個人の幸福の追求や自己実現には、健康の保持が必要な事はいうまでもない。その為、人間に関しては身体的・精神的成長や、その内在する機能の発達を十分に理解する必要がある。さらに人の成長・発達に影響を与える環境との関連について理解していく必要がある。人間の本質、人間の生命、人間の生き方、これらは彼女自身の経験からしても、人間の基本課題である。加えて看護教育では人々の健康に影響を与える因子について身体内・外の環境から学ぶ必要がある。そのための教育の一つが人体の構造と生理学である。これは、身体内部環境の中の肉体（physical）に関わる学習である。ナイチンゲールが開始した教育には当時の医学的要素を含めて、見習い生たちが具有しなければならない知識・技術、あるいは経験から理論へのプロセスを含んだ看護学が学問になるべき要素がふんだんに盛り込まれていた。

しかしながら、他方、“見習い制度”は教育の場や教育者の質によってその効果が半減する危険性も有し、教育を準備する者の目的によっては、ややもすれば人格を無視した徒弟制度的な教育に変貌する要素も持っている。貴族主義社会の慣習を否定しながら、その社会のあらゆる特権を行使した一人の女性、ナイチンゲールの教育そのものが彼女の高い価値規範から生まれたものである。こうあるべきというナイチンゲールの熱意は一方において有徳と評価されても、他方においてデュエイが述べたように、独り善がりの価値観を

押し付けたと評価されても仕方がないような一面もある。絶対的な強制力を持った教育が個人の行動のみならず、思考をも制限する恐れがある事は

言うまでもない。社会の状況に合わせる事より、受け継がれた教育方法を遵守する事の方が重要という結果にもなりかねない。

## 注

- 1) Florence Nightingale (1888); To the nurses and probationers trained under the “Nightingale Fund”, (湯槇ます他訳；ナイチンゲール著作集第三巻，看護師と見習い生への書簡，p430，現代社，1985年.)
- 2) Florence Nightingale (1888); 前掲書1), pp430-431.
- 3) Florence Nightingale (1882); Nurses, Training of, and Nursing the Sick, (湯槇ます他訳：ナイチンゲール著作集第二巻，看護師の訓練と病人の看護，p75，現代社，1985年.)
- 4) 佐々木秀美著；ナイチンゲール教育思想の源流 日常生活は心に問いを抱かせ，知性はその問いに答を要求する，看護学統合研究，Vol.12, No.1, pp42-67, 2010年.
- 5) 佐々木秀美著；ナイチンゲール精神的危機から自立へのプロセス，看護学統合研究，Vol.12, No.1, pp24-41, 2011年.
- 6) 佐々木秀美著；ナイチンゲールイギリス陸軍を改革する－学習（経験）したことから学習せよ，看護学統合研究，Vol.13, No.1, pp29-48, 2011年.
- 7) 佐々木秀美著；ナイチンゲール－女性の専門職を創設する－19世紀は女性の世紀，看護学統合研究 Vol.13, No.2, pp16-41, 2012年.
- 8) 佐々木秀美著；ナイチンゲールと看護教育－その教育目的へのアプローチ，看護教育，Vol.36, No.1, 1995年.
- 9) 彼女は自分の著書にこの新しい職業に関して適当な言葉が目下のところ見付からないのでとりあえず看護師と命名すると述べている.
- 10) Florence Nightingale (1858); Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals, (湯槇ます他訳；ナイチンゲール著作集第一巻，女性による陸軍病院の看護，p39，現代社，1985年.)
- 11) 佐々木秀美著；ナイチンゲールと看護教育－その教育方法へのアプローチ，看護教育，Vol.37, No.2, 1996年.
- 12) 井上久男著；近代日本教育法の成立，p19，風間書房，1990年.
- 13) ブライアン・サイモン著，成田克矢訳；イギリス教育史 I，p17，亜紀書房，1977年.
- 14) T・H・グリーン著，松井一麻呂他訳；イギリス教育制度論，お茶の水書房，1983年.
- 15) スチーブン・フンフリーズ著，山田潤他訳；大英帝国の子ども達，柘植書房，1990年.
- 16) 三好信治著；イギリス公教育の歴史的構造，亜紀書房，1968年.
- 17) チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens 1812-1870)；イギリスの小説家。法律事務所で下働き後に民法博士会館の議事速記者になり，22歳でロンドンの新聞記者になる。彼は小説中に多彩な人物を登場させ，その当時の社会悪を激しく批判した。小説『マーティン・チャズルウィット』ではギャンプ婦人という卑しい女性を登場させ，病院看護の実態を批判した。
- 18) シャーロット・ブロンテ (Charlotte Bronte 1816-1855)；イギリスの女流作家。1835年母校のロウ・ヘッドの教師になったが，辞めて家庭教師になる。しかし，これも直に辞めてしまう。エミリー (1818-1848)，アン (1820-1849) の三姉妹で自分達の学校を作るつもりであったがこれも失敗した。代表作『ジェーン・エア』は作者自身の自叙伝的作品であると言われている。
- 19) トマス・ヒューズ (Thomas Hughes 1822-1896)；ラグビー校におけるアーノルドの弟子 (1834-1842)，フレデリック・D・モリスらと共に労働者大学の設立に当たり，後にその学長になった。
- 20) ジョン・ロック (John Lock 1632-1704)；イギリス経験論の代表的哲学者。近代民主主義の代表的思想家の一人。オックスフォードにて医学と哲学を学ぶ。ピューリタン革命，王政復古，名誉革命

- と激動していく時代に生活し、人民主権に基づく代議的民主政治の理論を基礎づけることによって、名誉革命の指導的理論家になった。医師でもあり、ホイッグ党初代党首、シャフツベリー伯爵と親交を結び、政治的にもその生涯を共にした。著作『教育に関する考察』は有名。
- 21) John Lock; Some Thoughts Concerning Education, (服部都知文訳；教育に関する考察, 岩波書店, 2000年.)
  - 22) ジャン・ジャック・ルソー (Rousseau Jean Jacques 1712-1778)；フランス啓蒙期の天才思想家。彼の活動はきわめて多面的で、その主権在民、自由平等、愛国などの思想がアメリカ独立やフランス革命に理論的基礎を与えたのみでなく、社会主義、人格主義、永久平和の理想、ヒューマニズム教育、ロマン主義など、近代を形成する先駆者である。人間の自然の善性を原理に教育は宝の詰め込み出なく、ただ被教育者の自然的能力の開花を妨げるべきものの除去を目標とする「消極教育」を主張した。知的早期教育の否定、徳育と体育の重視、実物教育、教育の手段化に反対してまず人間たれと説くこと、など教育学上画期的な見解を示し、カントにも大きな影響を与えた。
  - 23) ルソー著、永杉喜輔他訳；エミール, p14, 玉川大学出版会, 1984年.
  - 24) プライアン・サイモン著；前掲書13), p17.
  - 25) ベンジャミン・ジョウエット (Benjamin Jowett 1817-1893)；イギリスのギリシャ哲学者。ナイチンゲールの思想に共鳴し、彼女の仕事を手伝い、多くの助言を与えた。ナイチンゲールの生涯の友人である。
  - 26) T・H・グリーン著；前掲書14), p7.
  - 27) Charles Dickens, David Copperfield (1849-1850), (中野 好夫訳；デイビッド・コバフィールド, 新潮文庫, 1989年.)
  - 28) チャーティスト運動 (Chartist Movement)；ロンドン労働者協会のラベット (William Lovett 1800-1877) を中心に政治的運動を展開し、人民自ら自己教育のための学校施設を建設するべきであると主張した。彼らの主張は基本的に民衆教育とその制度的確立である。『イギリス公教育の歴史的構造』より。
  - 29) 三好信治著；前掲書16), p12.
  - 30) カール・マルクス (Karl Marx 1813-1883)；国際的共産主義の祖。ボン大学とベルリン大学で法律を学んだ。1848年に共産党宣言を完成させ、その中で国家は抑圧の道具であり、宗教や文化は資本家階級のイデオロギーだと攻撃した。1849年にロンドンに落ちてから経済学を研究し、『資本論』を書いた。
  - 31) カール・マルクス著、長谷部文雄訳；資本論, p321, 河出書房, 1970年.
  - 32) アンドリュー・ベル (Andrew Bell 1753-1832)；助教方式・モラトリアル方式。学級を小グループに分け、優秀児に担当させ、担当グループの教授・管理を分担させる相互教授法。多数を安価に教える方法をランカスターと一緒に開発した。
  - 33) ジョセフ・ランカスター (Joseph Lancaster 1778-1838)；助教方式・モラトリアル方式。学級を小グループに分、優秀児に担当させ、担当グループの教授・管理を分担させる相互教授法。多数を安価に教える方法をベルと一緒に開発した。
  - 34) ケイ・シャトルワース (Kay Shuttleworth 1804-1877)；医師でもあり、救貧法行政官であった。ナイチンゲールの友人であるチャドウィックは彼の友人でもある。
  - 35) 三好信治著；前掲書16), p144.
  - 36) 三好信治著；前掲書16), p154.
  - 37) ジョハン・ヘンリック・ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827)；哲学者としてまた、教育思想家でもあり、貧民教育の実践者としても有名である。
  - 38) 仲新編集；学校の歴史第5巻, 教員養成の歴史, p 307, 第一法規出版, 1879年.
  - 39) ペスタロッチー著、長田新訳；隠者の夕暮れ, p5, 岩波文庫, 1987年.
  - 40) フレデリック・フレーベル (Friedrich Frobel 1782-1852)；ドイツの教育家。幼稚園の創始者。イエーナ大学時代ドイツ、ロマン派の影響を強く受けると同時に、1805年ペスタロッチーに会い、決定的

な影響を受けた。内在的には超越的な神と自然と人間とを統一的にとらえる。彼は教育の原理として自己活動の原理，労働の原理，社会の原理の3つを提唱し，個人の発達と人類の発展とを相互媒介的に考えた。は童の作業や遊びは個人の発達の問題であることに止まらず，人類の発展に連なるものと評価される。

- 41) フォン・マーレンホルツ・ビュウロー (Bertha von Marenholtz Bülow 1810-1893)；フレーベルの設立した幼稚園の経営に多大な援助をしたばかりではなく，フレーベルの業績を世界中に広めようと自分の生涯をかけた。
- 42) Rita Kramer; Maria Montessori -A Biography-, (平井久監訳；マリア・モンテッソーリ子どもへの愛と生涯-, 新曜社, 1992年.)
- 43) マリア・モンテッソーリ (Maria Montessori 1870-1952)；イタリアの医師，教育学者。精薄児に関心を持ったモンテッソーリはエドワル・セガン (Edouard Seguin 1812-1880) に影響を受け，子どもの家を開設して，3歳から6歳までの子どもを対象に彼等を自由に行動させた。かなりの選択の余地を与えながら，特別に考案された活動や道具を用いる教育システムを開発した。モンテッソーリによって開発された精神障害を持つ子どものための教育法は，モンテッソーリ・メソッド (Montessori Method) として有名であり，世界中に影響を与えた。
- 44) 三好信治著；前掲書16)
- 45) マシュー・アーノルド (Matthew Arnold 1822-1858)；イギリスの詩人，批評家。トマス・アーノルドの息子。『教養と無秩序』などでイギリス国民の清教徒的偏狭を攻撃して，ギリシャ精神の必要を説き，文芸批評から文明批評に至った。ナイチンゲールの従兄弟であり，詩人でもあるアーサー・ヒュー・クラフは彼の友人である。
- 46) 三好信治著；前掲書16)，p322.
- 47) トーマス・バビングトン・マッコリー (Thomas Babington Macaulay 1800-1859)；歴史家，ウィッグ系政治家。グラスゴウ大学総長。
- 48) 三好信治著；前掲書16)，pp313-314.
- 49) エドウィン・チャドウィック (Sir Edwin Chadwick 1800-1890)；1867年当時師範学校長。英国の衛生改良家。貧民法委員会の書記を長い間務めた。
- 50) ハリエット・マーティノウ (Harriet Martineau 1802-1876)；英国の女流小説家，経済学者。デイリー・ニュースの主筆をしていた。彼女は情報や知識を小説の形で出すことを思いつき，数多くの物語を書いて政治や経済や救貧院の話などを解りやすく解説して好評を得た。『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』セシル・ウーダム・スミス著より
- 51) ドロシ・ビール (Dorothea Beale 1831-1906)；イギリス女子教育の先駆者。チェルトナム女子大学の校長を務め (1858-1906)，1885年にはチェルトナムにイギリス初の女性教師養成学校としてセント・ヒルダス・カレッジを創設。1893年 (明治26年) に女性教師向けにオックスフォード大学に作られたセント・ヒルダス・ホールの後援者になった。
- 52) イマヌエル・カント (Immanuel Kant 1724-1804)；ドイツの哲学者。ケーニヒスベルクの生まれる。同地の大学に進み神学・哲学を学ぶ。後，1746年にケーニヒスベルク大学の私講師になり，1755年に同大学の論理学・形而上学の正教授となる。
- 53) ヨハン・フレデリック・ヘルバルト (Johann Friedrich Herbert 1776-1841)；ドイツの哲学者。ケヘルバルトによれば我々は経験から出発しなければならないが，その経験は何ら認識を与えない。経験概念を修正し，その矛盾を取り除くことが哲学の仕事である。矛盾に満ちた経験概念を矛盾なき明瞭判明な概念にまで修正し，現象界に明確な基礎を与える「諸実在者の学」としての形而上学を構想した。この形而上学を応用した自然哲学と心理学。
- 54) 滝内大三著；イングランド女子教育研究，p 255，法律文化社，1994年。
- 55) ヒッポクラテス；(Hippocrates B・C460年頃)；医学の父とも呼ばれるギリシャの医師。医業を職業とするもののヒッポクラテスの誓いを作ったといわれる。医学史をまとめた『ヒッポクラテス事典』がある。

- 56) 高木喜寛著；高木兼寛伝，三秀社，1922年。
- 57) 松田誠著；高木兼寛伝，講談社，1990年。
- 58) エスター・ルシル・ブラウン (Esther Lucile Brown) 著，小林富美栄訳；これからの看護，p75，日本看護協会出版会，1988年。
- 59) エイブラハム・フレックスナー (Abraham Flexner 1866-1959)；教育改革者。中学校での教育経験後にハーヴァード大学で心理学を学んだ。彼のアメリカとカナダの医学教育に関するカーネギー財団報告は，生評価の基準カリキュラム，設備が欠落した営利中心のシステムを暴露して，医学教育に多大な影響を与えた。
- 60) Florence Nightingale (1888)；前掲書1)，p395。
- 61) 佐々木秀美著；プラグマティズムに立脚したナイチンゲールの教育哲学－その－1 プラグマティズム探求 パースの生涯をてがかりに－，総合看護，Vol.44, No.2, pp5-15, 2009年。
- 62) 佐々木秀美著；プラグマティズムに立脚したナイチンゲールの教育哲学－その－2 パース哲学における探求の過程－，総合看護 Vol.44, No.2, pp5-15, 2009年。
- 63) 佐々木秀美著；プラグマティズムに立脚したナイチンゲールの教育哲学－その－3 実践の哲学としてのプラグマティズムと看護教育－，総合看護 Vol.44, No.3, pp59-67, 2009年。
- 64) Florence Nightingale (1858)，前掲書10)，pp39-40。
- 65) ヨジアス・ブンゼン男爵 (Josias von Bunsen 1791-1860)；プロシアの大使。ヨーロッパ中にその名を知られた聖書学者であり，エジプト学者としても知られている。英国の良家の娘と結婚し，巨万の富を有し，女王やアルバート殿下とも親しい熱心な福音主義者。ナイチンゲールは彼の家に良く出入りし，書物を借り，考古学や宗教を語り合ったとされる。セシル・ウーダムースミス『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』より。
- 66) Harriet Martineau's Writing; British History and Military Reform, vol.6, England and her Soldiers, p179, Edited by Deborah Anna Logan Pickerring & Chatto, 2005.
- 67) Harriet Martineau；前掲書66)，p178。
- 68) Harriet Martineau；前掲書66)，p179。
- 69) 佐々木秀美著；看護教育における思考訓練の『How we think てがかりに－，明星大学教育学研究紀要，pp39-47，2003年。
- 70) Florence Nightingale (1860)；Note on Nursing, p16, Scutari Press, 1992.
- 71) Florence Nightingale (1888)；前掲書1)，p303。
- 72) Florence Nightingale (1860)；前掲書70)，p164。
- 73) Florence Nightingale (1863)；Note on hospital, (湯槇ます他訳；病院覚え書，ナイチンゲール著作集第二巻，現代社，1983年。)
- 74) Charles Dickens; MARTIN CHUZZKEWIT, Oxford University Press, 1987.
- 75) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale; Cassandra/Suggestions for Thought, p161, Pickering & Chatto Limited, 1991.
- 76) Florence Nightingale (1882)；前掲書3)，p90。
- 77) Florence Nightingale (1882)；前掲書3)，p80。
- 78) Florence Nightingale (1858)；前掲書10)，pp39-40。
- 79) Florence Nightingale (1888)；前掲書1)，p332。
- 80) メアリ・ウルストンクラフト著，白井堯子他訳；女性の権利の擁護，p23，未来社，1993年。
- 81) エミール・デュルケーム (Émile Durkheim 1858-1917)；オーギュスト・コント (Isidore Auguste Marie François Xavier Comte 1798-1857) 後に登場した代表的な総合社会学の提唱者であり，その学問的立場は，方法論的集団主義と呼ばれる。社会学の他，教育学・哲学などの分野でも活躍した。特に彼の独自の視点から社会現象を分析し，経験の科学としての社会学の立場を鮮明に打ち出した人物である。実証主義の科学として社会学が未だに学問として確立されていない状況を見たデュルケームは，他の学問にはない独自の対象を扱う独立した科学としての地位を築くために尽力した。

- 82) デュルケーム著, 麻生誠他訳; 道徳教育論, p63, 明治図書出版, 1974年.
- 83) ジョン・デューイ (John Dewey 1859-1952) アメリカの哲学者. プラグマティズムの大成者として概念道具説を主張し, 新しい行動的ヒューマンズムによって, 進歩主義教育の創始者となる. ニューイングランドのヴァーリントンに生まれ, ヴァーモント大学を卒業, ジョンス・ホプキンス大学で学位を取り, シカゴ大学, コロンビア大学の主任教授としてアメリカの哲学界のみならず, 思想界全体を指導した.
- 84) デューイ著, 松野安男訳; 民主主義と教育, 上, p196, 岩波書店, 1982年.
- 85) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale; 前掲書75), pp11-12.
- 86) デューイ著, 松野安男訳; 前掲書84), p127.
- 87) フランシス・ベーコン (Francis Bacon 1561-1626); イギリスのキリスト教神学者・哲学者, 法律家である. 12歳でケンブリッジ大学トリニティ学寮に入学. その後, ロンドンの法学院で法律を学ぶ. 18歳で父を亡くした後, 23歳で国会議員となり, 当時, エリザベス女王の寵臣だったエセックス伯の腹心となる. 1601年にエセックス伯が反乱を起こすと法律家として告発し, 処刑後は事件の全貌を明らかにする公開書の作成にあたった, 1605年に『学問の進歩』を出版する. 1607年に法務次長になったことを皮切りに順調に栄達し, 1617年に国璽尚書, 翌年には大法官となるが, 汚職の嫌疑を受けて失脚. 4日間ではあるが, ロンドン塔に閉じ込められた.
- 88) ルソー著, 永杉喜輔他訳; エミール, p14, 玉川大学出版会, 1984年.
- 89) デューイ著, 松野安男訳; 前掲書84), p190.
- 90) シグモント・フロイト (Sigmund Freud 1856-1939); ウィーン大学で医学を学んだ後, ウィーン病院に勤め, 神経医学を専攻する. その後, 精神病理学に転向し, 精神療法としての精神分析を洗練させ, 精神分析学を創始した.
- 91) Florence Nightingale (1888); 前掲書1), p397.
- 92) ヤン・アモス・コメニウス (Johann Amos Comenius 1592-1670); モラビア生まれの教育思想家. キリスト教の神父. 彼の主著は, ラテン語教育の手法を軸に教育学そのものの体系を考案した『大教授学』, 『開かれた言語の扉』の他に, 世界初の子どものための絵入り子ども百科事典『世界図会』である. 『大教授学』の中で彼は「すべての人にすべての事柄を教授する」と述べ, 教育の機会均等を初めて主張した. 人類が共通の普遍的な知識を共有することによって世界平和が実現すると考えた. その方法は直感教授であり, その教育方法はヨーロッパに影響を与えた. また, コメニウスは, ライフサイクルの全般を通しての生涯学習を初めて体系的に語った教育学者でもあり, その中には誕生前の母親に対しての教育, 母親教育から高齢期には, 自らの死への心の準備, 死の受容といった今日的な観点も含まれている.
- 93) ヤン・アモス・コメニウス著, 稲富栄次郎訳; 大教授学, 玉川大学出版, 1965年.
- 94) ジーン・ピアジェ (Jean Piaget 1896-1980); スイスの心理学者. ジュネーブ大学心理学教授兼ルソー研究所教授. 児童の言語, 判断, 推理, 数の発生, 空間表象, その他を通じて児童の知的活動の機能的側面を分析し, 更にその内容的側面を明らかにし, 児童の心理の本質及びその発達過程について重要な貢献をなした.
- 95) 波多野完治編; ピアジェの発達心理学, 国土社, 1989年.
- 96) デューイ著, 松野安男訳; 前掲書84), p96.
- 97) 世阿弥著, 野上豊一郎他校訂; 風姿花伝, 岩波文庫, 1999年.
- 98) Florence Nightingale (1871); Introduction by Florence Nightingale [In] Memorials of Elizabeth Jones. By her sister, Florence Nightingale. London & Co, (湯槇ます他訳; ナイチンゲール著作集第三巻, アグネス・ジョーンズをしのいで, p246, 現代社, 1985年.)
- 99) Florence Nightingale (1882); 前掲書3), p95.
- 100) ミッシェル・フーコー (Michel Foucault 1926-1984); フランスの哲学者. 実証的な科学的思考とも哲学的存在論的違った無意識的文化の体系に思考の基底を求め, これをエピステーメと呼んでその変化をヨーロッパ思想の根底に探り, 人間諸科学の考古学を目指した.

- 101) Michel Foucault (1975) : Naissance De La Prison, (田村俣訳 ; 監獄の誕生, p143, 新潮社, 1977年.)
- 102) Florence Nightingale (1888) ; 前掲書1), p400.
- 103) デューイ著, 松野安男訳 ; 前掲書84), p187.
- 104) デューイ著, 松野安男訳 ; 前掲書84), p207.
- 105) デューイ著, 松野安男訳 ; 前掲書84)
- 106) デューイ著, 松野安男訳 ; 前掲書84), pp86-87.
- 107) カント著, 清水清訳 ; 人間学・教育学, p331, 玉川大学出版部, 1977年.
- 108) カント著, 清水清訳 ; 前掲書107), p341.